

こだわりを強く示す重度重複障害者との「共同体験」 を目指した動作法の事例

白濱, あかね
九州大学大学院人間環境学府

古賀, 聡
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/4485360>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 11, pp.35-42, 2020-03-11. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：



こだわりを強く示す重度重複障害者との「共同体験」を目指した動作法の事例

白濱あかね 九州大学大学院人間環境学府 ／ 古賀 聡 九州大学大学院人間環境学研究院

要約

本論文では、こだわりの強さや情緒の不安定さなどの問題を抱える重度重複障害者に対して動作法を実施し、「共同体験」を目指した心理リハビリテーションキャンプの事例について検討した。初日は、Aが自体に注意を向けることはほとんどなく、動作課題中も一方向的なやりとりに終始し、筆者は戸惑いを覚えた。二日目以降は、腕挙げ課題や肘屈げ課題において、筆者がAの緊張や動きを感じ取り、その感覚を同じように感じているということを言語的、非言語的に伝えることを意識した。また、Aに対してどのように緊張を弛め、どのように動いてほしいについても、言語的な教示だけでなく、Aに触れた手を用いて力の加減や方向性を示していくことを試みた。その結果、二日目以降はAがリラックスして課題に取り組むことが増え、筆者と課題を行うことを要求する様子もみられるようになった。また、課題以外の場面で、自身の要求が受け入れられない場面であっても、感情をコントロールできた。このように、言語的なコミュニケーションが困難な重度重複障害者に対して、動作法による身体を通した「共同体験」を重ねることは、情緒的な側面に対する支援に有効である可能性が示唆された。

キーワード：重度重複障害、動作法、共同体験、知的障害、肢体不自由

I. 問題と目的

重度重複障害者とは、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱などの障害を二つ以上併せ有する者、あるいは発達の側面や行動的側面において日常的な支援が必要である者とされている（文部科学省、1975）。重度重複障害者は、行動的・情緒的問題を抱えていることが多いが、言語的なコミュニケーションが困難である場合も多く、支援者側が対応に苦慮することも多いと思われる。徳永（2003）は、重度・重複障害児はことばを持たないだけでなく自分の意図や要求を周囲の人に向かって発現することが乏しいように見え、周囲の人の働きかけの意図を理解することも困難であるかのように捉えられることが多く、指導者は指導の糸口をつかむことが困難な場合が多いと述べている。

このような情緒的な問題を抱える重度重複障害者に対するアプローチの一つとして、動作法が挙げられる。動作法とは、1960年代に成瀬悟策らによって開発された、動作を介し心理的な問題を取り扱う心理療法である。動作法は、脳性麻痺をはじめとする肢体不自由児者の緊張の緩和などの生理・物理的課題のみならず、不適切な緊張を自身で弛めるといった主体的な活動のあり方に変化をもたらすアプローチとして重要であると考えられる。また、動作法は、「身体という、まさに自己と密接に結びつき、内なる現実の基底である存在への自己の関わり方を見直し、最も確かな現実を認める（藤岡、1987）可能性を持つもの」と言われており、身体を現実世界と自己とを結ぶものとして捉え、その身体に直接的にアプローチすることにより、自体の感覚などのクライアントにとっての「現実」の感覚を得ることや、その感覚を他者と共有することが可能であると考えられる。特に、言語表現や身体運動に困難を示す重度重複障害者は、日常生活においては自体の感覚を実感したり、他者と感覚や感情を共有したりする経験が得にくいと考えられ、このような身体を通した他者とのコミュニケーションを体験することは重要であると考えられる。これまでの臨床実践においても、重度重複障害や知的障害を持つクライアントに対して動作法を実施し、クライアントの日常生活に変化を及ぼした事例が報告されてき

た。例えば、本吉（2013）は、重度重複障害者に対して動作法を実施したところ、身体運動の変化のみならず、クライアントがこれまでに習得していなかったジェスチャーを用いてセラピストに自身の要求を伝えるなど、コミュニケーションの面でも変化が示されたことを報告している。また、石倉（2001）は、引きこもりや暴力行為があり対人関係に困難を示す肢体不自由者に対して動作法を実施したところ、独語や攻撃性が減少し、自己表現や他者交流が増加したと述べている。

特に、動作法において、重度重複障害者にとって重要であると思われるのが「共同体験（成瀬、2009）」である。「共同体験」とは、相手の身体の微妙な緊張や動きを同じようになぞるとともに、相手がその動作をしているときの気持ちをなぞり、類似の体験をすることであるとされている。このような「共同体験」によって、「クライアントと援助者の間に共感的な体験と理解という相互交流」が成立し、相手の身になる体験、相手に自分を重ねて理解する体験を重ね、新たな対人関係の体験を拡げることが可能になると説明している。重度重複障害を持つ人々にとっては、このような身体を通した共感の体験を重ねることが重要であり、このような体験の積み重ねが精神の安定や対人交流の改善に影響するのではないかとと思われる。

本論文では、こだわりの強さや情緒の不安定さなどの問題を抱える重度重複障害者に対して、動作法による「共同体験」を目指した事例を取り上げる。先述の通り、重度重複障害者は関係構築やコミュニケーションに困難を有することが多く、彼らと関わる人々は戸惑いを感じることも多いと考えられる。本事例においては、重度重複障害者に関わるなかで生じる戸惑いや混乱についても振り返り、重度重複障害者に対する理解を深めること、彼らとどのように「共同体験」を目指していくのか、「共同体験」によって何が得られるのかについて検討していくこととする。

II. 事例の概略

- 1) トレーニー：A（30代男性）
- 2) 診断：脳性麻痺、知的障害
- 3) 知的側面：「プール」などの単語の表出は可能であり、【げ

んこつ山】や【お風呂】などジェスチャーで要求を示す。また、自身と関わりがある人に対して指差しをする、自分から相手に近づいていくなどの行動もあり、他者への希求性は非常に高い。

4) 情緒的側面：気持ちが悪く落ちついているときは、他者からの働きかけに対して表情を和らげる様子がみられる。他方、こだわりが強く、自身の要求が通らないなどの不本意な状況下では興奮や緊張が顕著であり、キャンプ中も興奮して暴れる、叫ぶなどの行動があり、夜眠ることができないこともあった。

5) 姿勢特徴：車いすでの移動が主であるが、四つ這いでの移動も可能である。ジェスチャーを示す、スプーンで食事をするなどの上肢の動きは可能であるが、手指の細かな動きは難しく、肩や腕、手首などに過剰に力を入れて対応することが多い。あぐら坐位の保持は可能であるが、上体が揺れ不安定である。骨盤は起きにくく、腰は反っている。右側の肩甲骨下が屈に、左側は首から肩甲骨周辺にかけて屈になっており、首は右に傾きやすい。

6) キャンプの構造：X年8月に、3泊4日間の宿泊形式のキャンプを実施した。今回の心理リハビリテーションキャンプにおいては、一日目にインテークと1回の訓練を、二日目および三日目に3回の訓練を実施した。1回の訓練時間は1時間であり、一日目に1回、二日目、三日目にそれぞれ3回、計7セッションを実施した。筆者は、Aのトレーナーとしてキャンプに参加し、動作訓練だけでなく、集団療法や食事の時間を共に過ごした。動作訓練は、スーパーバイザー（以下SV）の指導のもと進めた。

Ⅲ. 事例の経過

(1) 一日目（#1）

インテーク：SVと共に身体の状態を確認し、Aの見立てと方針を立てた。Aは日常生活において、過剰な緊張を入れることによって姿勢を保持する、身体を動かすという対処をしているため、過剰な緊張を弛緩し、その上で適切な力を入れて身体を動かしていくことが課題となった。また、Aは興奮すると一晩中眠れず、声を上げて暴れることもあるなど、情緒面の安定およびコントロールが必要であると考えられた。そのため、動作法においては、身体の高緊張を弛緩すること、適切な力で身体を動かしていくことを目指すこととした。また、Aが課題中に落ち着いて過ごせるようことが重要であると考えられた。そこで、身体に入った過剰な緊張を弛緩するための動作課題として、軀幹のひねり課題と背反らせ課題を設定した。また、適切な力の入れ方やコントロールを目指すための動作課題、そしてAとの「共同体験」

を目指すための動作課題として、腕挙げ課題と肘屈課題を設定した。各動作課題の内容とねらいについては、表1に示す。

特に、上記の課題の中でも、腕挙げ課題と肘屈課題を重点的に実施することにした。腕挙げ課題では、Aが自体の感覚に注目し、適切な緊張でもって自体を動かす体験、ひいては自身の情動や行動をコントロールする体験を積むことができると考えられた。しかしながら、腕挙げ課題はAが好きな課題であり、特にSVと一緒にこの課題に取り組むことに執着していた。それゆえに、Aはこの課題に取り組む際、興奮のあまり腕に過剰な力を入れて動かそうとすることが多かった。また、腕挙げ課題は、腕や肩だけでなく手首や手指のコントロールも求められるため、Aにとっては様々な部位に注意を向けなければならない複雑な課題であった。その点、肘屈課題はAにとって初めての課題であり、腕挙げ課題のように興奮を伴う可能性は少ないと考えられた。加えて、注目すべき身体部位も、肘、手首、手指と限定されるため、自体に注目しコントロールする体験を積むというねらいを達成しやすくなると考えられた。

このような動作課題を行うなかで、トレーナーはAの上肢の動きや緊張を細やかに感じ取り、身体的な動きや緊張に合わせて援助を行うことに加え、Aの動きや緊張に伴う心理的な緊張や不安、もどかしさなどの心の動きについても共に感じられることを目指すことを目指すこととした。トレーナーがAの緊張や身体の高緊張に気づき、それに伴う困惑や苛立ちを共に感じながらも、「腕を挙げる」、「肘を屈げる」という共通の課題に向かっていくことが、Aにとっての「共同体験」になりうるのではないかと考えた。

#1（一日目1回目）：Aは落ち着いていたが、表情はぼんやりとしており、トレーナーが呼びかけても明確に反応を示すことは少なかった。Aの様子に戸惑いを覚えつつも、腕挙げ課題を実施することにした。「Aさん、腕挙げするから後ろに倒れますよ」と伝えてAの背後に回り、首に腕を添えた。Aは思いのほか素直に後方に身体を倒し、仰向けになった。しかし、それは単純にトレーナーに言われたから従っただけであり、そこにAの意思はないように思われた。トレーナーの戸惑いは一層強くなった。それでも、「じゃあ、腕挙げしましょうか」とAの肘と手首に手を添え、「一緒に動かしていきましょう」と伝えた。しかし、Aは腕全体に力を入れ、勢いよく動かそうとした。トレーナーはAの腕を止め、「ちょっと早いですね。一緒に動かしましょう。ゆっくり、ゆっくり、です」と「一緒に」、「ゆっくり」を強調して伝えた。すると、Aは腕を動かすペースを落とした。

表1. 各動作課題の内容とねらい

課題	内容	Aの身体の状態と課題のねらい
軀幹のひねり課題	側臥位で軀幹部を含む上体をひねる動きのなかで、軀幹部の筋緊張を弛緩する課題	Aは軀幹部に加え、肩甲骨周辺および胸部にも緊張が強く示されたため、上記の部分の筋緊張をゆるめることをねらいとした。
背反らせ課題	あぐら坐位で腰や背中を反らす動きのなかで、腹部の緊張を弛緩する課題	Aの上体は、腹部が収縮する緊張によって全体的に屈になっていたため、腹部を伸展させ、緊張を弛緩することをねらいとした。また、Aがトレーナーに身体を委ね、緊張を弛緩させることもねらいとした。
腕挙げ課題	仰臥位で腕を挙げる動きのなかで、身体の高緊張に注意を向け、自体のコントロールを行う課題	Aが自体の感覚に注目し、適切な緊張でもって自体を動かす体験や、トレーナーに動きを合わせるなかで自身の情動や行動をコントロールする体験を積むことをねらいとした。
肘屈課題	仰臥位で肘を曲げる動きのなかで、身体の高緊張に注意を向け、自体のコントロールを行う課題	腕挙げ課題と同様、自体の感覚に注目しながら適切な緊張で自体を動かすことや、自身の情動や行動をコントロールすることをねらいとした。腕挙げ課題に比べ、肘屈課題は注意を向ける身体部位が少ないため、より自体の感覚への注目やコントロールが達成しやすい課題であると考えられた。

トレーナーはAが腕を挙げていく動きに添っていった。Aの動きはごちなく、手首や手指は冷たく、緊張が入ったままであった。トレーナーは、再度Aの動きを止め、「ここに力が入っているから、ちょっと抜きましょうか」と言いながら、緊張が入った部位に触れて力を抜くよう促した。しかし、待っていてもAは動きを止めたまま、緊張を弛緩することができなかった。トレーナーは戸惑いを感じつつも、仕方なく、「…それじゃあ、上まで行きましょうか」と言うと、Aは動作を再開した。Aの腕は、肘が耳につく前に止まり、そこから腕を上げていくことが難しいようであった。「ここでちょっと待ちましょう」とトレーナーが促すと、Aはそれに応じて動きを止めたが、しばらくするとトレーナーの動きとは反対に自ら腕を下ろした。トレーナーは一瞬動きを止めたが、結局その動きに追従した。腕を下ろし終わると、Aは上体を起こし、あぐら坐位に戻ることを要求した。戸惑いを感じつつも再度Aに仰向けになるよう伝え、Aは黙ってそれに従った。肘屈げ課題を導入すると、Aは腕全体を挙げようとした。トレーナーは、「今度はここだけ動かすですよ」とAの肘を屈げた。Aは無表情で肘の屈げ伸ばしを行った。腕挙げ課題時と同様、Aがトレーナーの動きを気に留めることなく自身の意思に沿って腕を挙げていくか、トレーナーがAの緊張が抜けるまで待てずに腕を動かすことを促していくかという、一方通行のやりとりであるように感じられた。それは痛いほどわかるのだが、どうすればいいのかはわからなかった。回数を繰り返すと徐々に腕の動きはスムーズになってはきたが、Aの自主性は感じられなかった。Aは自分でもなくトレーナーでもない別のところに意識を向けているようだった。#1のAの取り組みは、自体に注意を向けてコントロールするというねらいとは程遠いように感じられた。

Aはある程度トレーナーの要求に応えるものの、すぐに上体を起こして坐位をとろうとするため、課題に取り組む時間は短かった。あぐら坐位になると、AはSVを指差し、腕を挙げるジェスチャーをトレーナーに示した。「SVの先生と腕挙げをしたいんですか？」と質問すると、Aは「はい」と言うように手を挙げた。これが初めて彼がトレーナーに向けて発信したジェスチャーであった。その後も、他トレーナーを指差し、【げんこつ山】のジェスチャーを示すなど、トレーナー以外の他者に注意を向けた。その度にトレーナーは「〇〇さんとげんこつ山がしたいんですね」とAの意図を推察して返したが、内心では寂しさや苛立ちが混ざった複雑な感情を抱いていた。結局、Aと共に課題に取り組んだ感覚が得られないまま、#1の訓練が終わった。

訓練場面以外の様子：訓練以外の場面では、トレーナーをじっと見つめることは時折あるものの、Aからトレーナーに対して関わりを持つことは少なく、他トレーナーに【げんこつ山】などの要求を求めることが多かった。また、集団療法場面などでは、自発的に取り組むことはなく、ぼんやりと過ごしていた。夜は眠ることができたとのことであった。

(2) 二日目 (#2～#4)

二日目の方針：#1では、Aと腕挙げ課題や肘屈げ課題に取り組む際、トレーナーの脳裏には常に「わからない」、「どうすればいいんだろう」という迷いが浮かんでいた。そのような迷いに囚われてしまうことで、Aの感覚や感情を感じ取ることもできなくなってしまっていた。そして、Aの感覚や感情が触れた

掌から伝わってくるということは、裏を返せばトレーナーの感覚や感情が触れた掌からAに伝わっている可能性があるということである。トレーナーがAに注意を向けていないことや、トレーナーが迷いや不安を抱えていることを、Aが察していた可能性があった。このようなトレーナーの態度から、Aは課題に取り組む際にトレーナーや自体の動きに注目しなかった可能性が考えられた。この反省を踏まえ、Aとの「共同体験」を目指すために、まずはトレーナー自身が構えすぎずに穏やかにAと関わることで、Aの感覚や感情に注意を向けることを目標とすることとした。

また、#1では、トレーナーはAの腕と手首に触れて援助をしていたが、Aにとって最も動きのコントロールが難しいのは掌や指先などの末端部分であると思われた。そのため、トレーナーは掌を合わせるような形でAの手指の緊張を共に感じながら、緊張の弛緩を促していくことを目指すことにした。Aが困難を感じている動きや緊張箇所に触れ、その緊張を共に体験することが「共同体験」につながるのではないかと考えられた。

#2 (二日目1回目)：Aは#1とは異なり、やや興奮していた。表情は落ち着いていたものの、Aは部屋中を見回し、指さしやジェスチャーを繰り返していた。手足には汗が滲んでいた。時間が過ぎていくことに焦りを覚えたトレーナーは、一通りAの要求を聞いた後で、「それはあとでやりましょうか」、「課題をしてみませんか」とAを誘ったが、Aは手を振り拒否の意を示した。相変わらずトレーナーのなかには焦りがあったが、昨日の反省を思い出し、一旦Aの感情を共に感じてみることを目指した。トレーナーはAの隣に座り、Aが指さす方を見た。「〇〇先生ですか？」と尋ねると、Aは手を挙げて肯定した。続けて、こぶしで腹部をこするようなジェスチャーを示した。「ん？なんですかね…お風呂？」と聞くと、Aはまた肯定した。「〇〇先生とお風呂に入ったんですか？」と返すと、Aは手を挙げた。「楽しかったですか？」と尋ねると、Aは笑顔を見せた。トレーナーとのやりとりのなかでAが笑顔を見せるのはこのときが初めてであった。Aは満足したかのように繰り返していたジェスチャーをやめた。そこで、「ちょっと横になって腕挙げでもしませんか？」と提案すると、Aは穏やかな表情で手を挙げ、肯定した。

まずは、Aが好きな腕挙げ課題から導入した。「どっちの手からしますか？」と尋ねると、Aは右手を挙げた。右手は、左手に比べると緊張がそれほど強くはなく、動きもスムーズであった。「Aさん、こっちの手を挙げるの上手ですね」と返すと、Aは笑顔を浮かべた。腕を挙げるよう促すと、Aは昨日と同様、一人で勢いよく腕を挙げようとした。「もう少しゆっくり行きましょう。この力も抜きましょう」と一旦動きを止めた。Aの手首は掌屈し、手指は握りこむような形で緊張が入っていた。そこで、トレーナーはAの手首や手指の緊張を共に感じながら、緊張を弛緩していく感覚を共有しつつ、緊張の弛緩を促していくことを目指すことにした。トレーナーはまず緊張が入っているAの手首に触れ、同じくらいの力で握った。そして、Aがうまく緊張を弛緩できた際には、「そうです。今、力抜けましたね」と言葉で伝えるだけでなく、Aの緊張の弛緩に合わせてトレーナーも力を抜いた。しかし、昨日と同様、どれだけ待ってもAの手指の緊張が抜けないこともあった。そのときは、Aの手首から掌にかけての掌屈緊張に対して、それとは逆の底屈方向に最低限の負荷をかけ、Aにゆるめるべき方向を示した。す

ると、じわじわと掌から指先にかけてAが緊張を弛める感覚があった。#2の訓練では、仰臥位の姿勢でAが眠そうに目を閉じることもあり、リラックスしているようだった。

#3 (二日目2回目): #2とは異なり、入室時からAは興奮していた。目は爛々と輝き、声を挙げながら指差しやジェスチャーを繰り返した。掌や足裏には汗が滲んでいた。その様子を見て一瞬躊躇したが、まずはトレーナーが平常心でAを迎えることが大事だと思い直し、#2と同様、まずはAの指さしやジェスチャーの意図を汲み取り、会話していくことにした。トレーナーに向かって、Aは【お風呂】、【プール】、【げんこつ山】などのジェスチャーを次々と見せた。その度に、トレーナーは何度も丁寧にAの意図を解釈し、伝え返した。最初はSVや他トレーナーへの要求を示すことがほとんどだったが、この頃から徐々に、Aはトレーナーに対して要求を示すようになった。他トレーナーを指さし、【お風呂】のジェスチャーを示すため、「昨日一緒にお風呂に入ったんですね」、「楽しかったんですね」と返すと、Aは肯定した。そして、再び【お風呂】のジェスチャーを見せ、トレーナーを指さした。「私とは一緒に入ってないですよ」と返すと、Aは手を振り、否定した。トレーナーはしばらく考え、「一緒に入りたいてことですか?」と聞いてみると、Aは肯定した。「いやー、一緒には入れないですよ」とトレーナーが笑いながら言うと、Aは驚いた表情になり、再びトレーナーを指さし、【お風呂】のジェスチャーを繰り返した。「うーん、まあ、一緒には入れたら、嬉しいですね」とトレーナーが言うと、Aは嬉しそうに肯定した。坐位の姿勢で会話をしながらゆったりと時間を過ごすことで、次第にAは落ち着きを取り戻していった。

Aの表情が穏やかになったのを見て、トレーナーはAに腕挙げ課題を提案した。Aは手を挙げて同意したが、腕挙げ課題を数回行くと、落ち着かない様子で状態を浮かせ、座位に戻ろうとする様子が見られた。Aが起き上がろうとする際には、Aの意思を尊重して座位に戻ることを繰り返した。座位に戻った際は、トレーナーがAの前に座り、「握手をしましょう」と言ってAの手を握り、「いち、に、いち、に」とゆっくり数を数えながら手首を掌屈、底屈など様々な方向に動かしていった。一緒に手首を動かしていくなかで、手首の弛緩に伴い、手指の緊張も少しずつ抜けていくように感じられた。そして、徐々にAの表情も穏やかになっていった。

#4 (二日目3回目): #3よりも感情が昂ぶっており、発汗が止まらず、Tシャツを着替えなければならないほどであった。トレーナーはこれまでと同様、坐位で会話をしながらAが気持ちを落ち着くことができるよう関わったが、Aは一旦は落ち着くものの、すぐに興奮することを繰り返した。

なんとか坐位から仰臥位に移行し、「肘を屈げるやつしませんか?」と尋ねると、Aは腕を挙げるジェスチャーを示した。「じゃあ腕挙げをして、次に肘屈げをしましょう」と提案すると、Aは同意した。トレーナーは、Aの腕や手首、手指の緊張を掌で感じつつも、自分の掌を用いて力を入れる、抜く、方向を示すことで、Aの緊張や動作に併せて援助を行った。このような援助を繰り返し行っていくと、トレーナーがAの緊張に添って自分の手の力をゆるめると、それに呼応してAの手指の緊張もゆるむことがあった。また、Aが主導となって腕を動かしてはいくものの、時折トレーナーがついてくるのを待っている

ように感じられることがあった。Aがトレーナーの働きかけに応じて緊張をゆるめる、トレーナーの動きを待って動かそうとするなど、動きのなかで相互的なやりとりができてきた感覚であった。腕を挙げて下ろしていく一連の動作を終えると、Aはトレーナーの方を見て、人差し指を立てた。「もう一回しますか?」にAは頷いた。トレーナーと腕挙げ課題をしているときにAが「もう一回」と求めたのは、これが初めてだった。トレーナーは嬉しさを噛み締めながら、もう一度Aと腕挙げ課題を行った。

訓練以外の場面: 訓練以外の場面では、#1に比べると、Aのトレーナーに対する関わりが増えてきた。トレーナーに対して自分のしたいことなどをジェスチャーで示した。それに対してトレーナーが応答すると、Aは笑顔を見せ、何度もジェスチャーを繰り返した。夜も眠ることができたとのことであった。

(3) 三日目 (#5 ~ #7)

三日目の方針: 台風の影響もあり、三泊四日を予定していたキャンプは二泊三日に変更となったが、訓練時間は三泊四日分実施することとなった。そのため、#4以降は、通常のスケジュールよりも動作訓練の時間が一回多くなった。このようなスケジュールの変更によってAが混乱をきたす可能性が考えられた。また、キャンプ最終日ということもあり、蓄積された疲労によって情緒が不安定となる可能性が考えられた。そのため、#5 ~ #7はまず、Aが落ち着いて最後まで過ごすことを第一の目的とし、Aの状態を見ながら動作課題を進めていくことを目標とした。動作課題については#4までに行ってきた内容を変更せずに実施し、トレーナーの援助も#4までと同様に行うこととした。#4では、Aがトレーナーの援助に合わせて緊張を弛めたり、Aがトレーナーを動きを待ったりするなどの双方向のコミュニケーションがとれていたと思われた。#5 ~ #7もこのような体験を通してAの精神的な安定を図るとともに、双方向的なやりとりの積み重ねができればと考えた。しかしながら、動作課題の導入や進め方、援助のあり方については、双方向的なやりとりに執着するのではなく、Aの状態に合わせて柔軟に対応していくことが必要であると思われた。

#5 (三日目1回目): スケジュール変更や訓練での疲れもあり、Aは落ち着きのなさや苛立ちを示す様子が多くみられ、「げんこつ山をしてほしい」、「プールに入りたい」、「早くご飯を食べたい」、「Tシャツを着替えない」などの要求をジェスチャーで示すことが多かった。#4までと同様、トレーナーはAが落ち着くまで訴えを受け止めることを目標とした。しかしながら、Aの要求は止まらず、むしろ要求が受け入れられないことがわかると、次第にAの苛立ちは増していった。Aの苛立ちは増強するにつれ、次第にトレーナーも不安と焦りを感じ始めた。トレーナーは、落ち着いてもらうことを目的に、Aが気に入っている腕挙げ課題を実施することを提案すると、一度は了承するものの、SVを指差した。それに対してトレーナーは、「まずは私と一緒にやりましょう」と伝えた。この時点では自覚がなかったが、振り返ると、トレーナーには昨日まではAとのやりとりが比較的うまくいっていたという自負や、最終日であり何らかの訓練効果を得たいという焦りがあったのかもしれない。トレーナーの対応に対して、Aは唸り声をあげながら身をよじって上体を起こそうと抵抗した。その様子を見たSVがAの傍に来て、腕挙げ課題を導入した。一緒に腕挙げ課題を行うと、Aはやっと

興奮を収めることができた。その様子を見ながら、またAではなく自分の感情を優先して関わってしまったと反省した。

#6（三日目2回目）：その後もやや興奮した状態が続いたが、休憩を取りつつゆっくりと訓練を進めていくと、Aは次第に落ち着きを取り戻してきた。SVとのやりとりにおいて、「深呼吸をして力を抜きましょう」と言うと、Aは「ふーって」と力いっぱい息を吐いていたが、腕挙げ課題を行った後、仰臥位の姿勢で自然と息を吐く様子もみられた。Aの興奮が収まったように感じられたため、トレーナーは肘屈げ課題を提案した。Aはそれに応じたが、しばらくすると、Aは上体を起こそうとした。トレーナーは「こっちの腕、あと1回だけ一緒にやったら、少し休憩にしませんか」とAの要求に理解を示しつつ、ある程度見通しを持たせて要求を明示した。すると、Aは再び仰臥位の状態に戻った。#4までに比べると、掌の発汗もあり、手首や手指の緊張も感じられた。トレーナーは、Aの心理的な緊張や興奮をゆるめるために、細かい自体のコントロールよりも、自体の感覚に注意を向けながらゆったりとしたペースで時間を過ごすことが必要であると考えた。トレーナーは基本的にはAの動きに添いつつ、緊張が入った際には動きを止め、手首や指をゆっくりと動かし、緊張が弛むのを待った。トレーナーが待っていると、ふっと緊張がゆるむこともしばしばあった。トレーナーがAの表情が穏やかになったように思えた。

#7（三日目3回目）：「着替えをしたい」、「ご飯を食べたい」とジェスチャーを繰り返す様子が頻回に示されたが、トレーナーがその要求をゆっくり聴き取ると、ジェスチャーをするのをやめ、課題の提案に応じた。#4までに比べると、課題を継続する時

間は短くなっていたが、Aの反応に応じて臥位から座位に戻ることを繰り返しながら、できる限りゆったりとしたペースで時間を過ごすことを意識した。課題中は、Aに手指の動きなどの細かい調整を求めることはせず、腕を挙げる際にトレーナーの動きに合わせるなどの大まかな要求を伝えた。手指や手首の緊張は強く、緊張を弛めることが難しい様子であったが、トレーナーが緊張箇所に触れて待っていると、ふと緊張が弛む瞬間があったため、それに併せてトレーナーも力を抜くことを意識した。緊張が弛んだと思うとすぐに力が入ってしまうことを繰り返したが、最後まで興奮を顕著に示すことなく、訓練時間を終えることができた。

訓練後：なかなか昼食が食べられないことに苛立ちを示し、険しい表情で何度もジェスチャーを示した。その度にトレーナーは、「訓練を頑張ったから、お腹すきましたよね」とAに共感を示しつつ、「でも、まだ準備ができていないみたいだから、もう少しだけ待ちましょう」とできるかぎり丁寧に状況をAに説明した。Aの表情は険しいままであったが、トレーナーの顔をじっと見て、ジェスチャーをやめた。トレーナーにはAが怒りを押し殺しているように見えた。昼食の時間になるとAは一旦は落ち着いたが、集団療法の企画でクイズを出すことになっていたため、昼食を中断しなければならなかった。トレーナーはAと一緒に席を離れ、参加者の前に移動した。Aは苛立ちを示し、席に戻りたいと要求した。トレーナーは、「もう少し待ってくださいね。今は、〇〇さん（他のトレーナー）がクイズを出しているから」とAをなだめた。Aは険しい表情のまま肩をいかせていた。しかし同時に、Aの呼吸からは、Aがどうにか感情

表2. Aとの面接経過		
日数	課題中のAの様子	トレーナーの所感
一日目	Aは課題中もぼんやりとしているか、SVや他のトレーナーに注意が向くことが多く、トレーナーに言われるがままに姿勢をとり、身体を動かしているようであり、主体的な取り組みであるとは言いがたかった。課題中は、Aがトレーナーの援助やペースを無視して腕を挙げていくか、トレーナーがAの緊張が抜ける前に腕を動かすことを促していくかという、一方通行のやりとりであるように感じられた。課題を一度終えるとすぐに起き上がり、SVや他のトレーナーに対する要求のジェスチャーを繰り返した。	Aがトレーナーや自体に意識を向けることなく、一方通行的なやりとりに終始することに戸惑いを感じ、「どうしたらいいだろう」と頭の中で考えながら課題を実施していた。この時、トレーナーにはAの感覚や感情を感じとり、理解する余裕がなかった。また、そのようにトレーナーがAとは別のところに意識を向けていることを、Aは感じ取っていたのかもしれないと考えた。それ故、Aもトレーナーやトレーナーとのやりとりに注意を向けることがなかったのではないかと考えられた。そのため、二日目は、こちらから意図的に何かを伝えようとするのではなく、まずはAの感覚や感情と向き合うことを意識することを目標とした。
二日目	Aは部屋を見回し、指さしやジェスチャーを繰り返していた。トレーナーがジェスチャーの意味を解釈して伝え返すと、Aは笑顔を見せ、ジェスチャーをやめた。腕挙げ課題を導入すると、Aはトレーナーの援助に合わせて緊張を弛緩させることができた。眠そうに目を閉じることもあり、リラクセスしているように感じられた。その後も訓練時は興奮を示すことが頻繁にあったが、トレーナーがジェスチャーによる要求を丁寧に受け取ることを繰り返すと、Aは落ち着きを取り戻した。これまでは、SVや他のトレーナーに対する要求の表明が主だったが、この頃から【げんこつ山】や【プール】などトレーナーに対する要求が増えてきた。また、腕挙げ課題時は、Aはトレーナーの動きに合わせて緊張を弛緩したり、腕を動かしたりする様子が見られた。3回目の訓練では、Aは人差し指を立て、もう一度腕挙げ課題を行いたいとトレーナーに要求した。	Aがジェスチャーを繰り返し見せるのに対し、まずはAの意図や感情にきちんと向き合うことが必要であると思い、Aの隣に座り、Aのジェスチャーの意図を解釈して尋ね返した。Aは自分の要求がトレーナーに伝わったことが確認できると落ち着きを取り戻し、気持ちを切り替えて動作課題の提案に応じることができた。一日目は、Aの手首と肘に手を置いて援助を行っていたが、Aは手指の緊張が特に強いため、トレーナーはAと掌を合わせるようにして、手指の緊張を共に感じながら弛緩を促していくことにした。また、Aの手指から感とれる緊張と同じくらいの力で握り、Aの弛緩に合わせてその力を抜いていくことで、Aの動きに合わせていった。そして、徐々にトレーナーの方が先に力を抜き、Aが手指の緊張を弛緩することを促していった。Aは次第にトレーナーに合わせて緊張を弛緩させたり、動作をコントロールしたりする様子が見られた。
三日目	スケジュール変更や訓練での疲労から、発汗や落ち着きのなさを示すことが多かった。自身の要求が受け入れられないと分かると、Aは苛立ちを示し、ジェスチャーを止めることができなかった。休憩をとりながら動作課題を実施していると、徐々にAは落ち着きを取り戻した。Aは課題中に上体を起こそうとすることもあったが、トレーナーが「あと一回だけやったら休憩しましょう」と言うと、仰臥位の状態に戻り、課題に取り組むことができた。その後も落ち着きなくジェスチャーを繰り返すこともあったが、課題中は緊張を弛緩させたり、表情を和らげたりする様子もあり、顕著な興奮を示すことなく終了することができた。訓練以外の場面でも、自身の欲求や感情に折り合いをつけることができる様子が見られた。	Aの興奮状態に戸惑いつつも、最終日でありAと課題を行いたいという思いもあり、Aの意図や感情を受け取らずにトレーナーの要求を伝えてしまうこともあった。Aはそれに対して声を挙げて抵抗を示した。SVの介入により、Aは一旦落ち着きを取り戻した。その後は、トレーナーのペースにならないよう、Aの様子を見ながら休憩を挟みつつ課題を行った。動作課題中は、Aが自体の感覚に注意を向けながらゆったりと過ごせることを目指し、Aに言葉で共感や指示を伝えることより、援助によって共感や指示を伝えていくよう努めた。

を抑えようとしている様子も感じられた。なんとかAはクイズが終わるまでその場にいらることができた。

閉会式では、Aは比較的落ち着いている様子だった。研修修了証明書の授与式では、声を上げて泣いていた。閉会式終了後、トレーナーがAの元に行き、「三日間ありがとうございました」と声をかけると、Aはじっとトレーナーの顔を見つめた。「また会いましょう」という言葉に、わずかに表情を和らげた。Aとの面接経過の概要を表2に示す。

III. 考察

考察では、Aとの「共同体験」に影響したと考えられる要因として、トレーナーの心的状態と動作課題の設定や援助を挙げ、この二点について検討を行うこととする。

1. 「共同体験」とトレーナーの心的状態の関係

#1では、Aはトレーナーの声掛けには応じるものの、言われるがままに身体を動かしている状態であった。また、腕挙げ課題や肘屈げ課題においては、Aがトレーナーの援助に沿わずに腕を動かしていくか、トレーナーがAを先導して腕を動かしていくという一方的なやりとりになりがちであった。トレーナーはこのようなAの様子に戸惑いを覚え、「どうすればこちらの意図を伝えられるか」、「どうすれば課題がうまくできるのか」について考えながらAと関わってしまっていた。その際、トレーナーはAの感覚や感情には目を向けられていなかった。そのため、初日のやりとりにおいては、Aもトレーナーも異なるところに注意を向けていたと考えられ、「共同体験」ができる段階ではなかったと考えられる。また、このようにトレーナーが焦りや不全感を抱えたままの状態と関わっていたために、Aとしても安心できる感覚を体験しにくかったのではないかと考えられる。このような反省を踏まえ、トレーナーは#2以降、まずはトレーナーが自分の考えに囚われず、Aの表現に注目し、Aの感情や意図をきちんと受け取れる状態であることを意識した。その結果、Aはトレーナーに対してジェスチャーによる要求を示し、その要求が受け止められると笑顔を見せ、課題の提案に応じる様子がみられた。#1とは異なり、言われるがままに課題に応じるというよりも、Aの意思によって課題の実施を決めたような印象であった。また、課題中もAは他のSVやトレーナーに注意を向けることは少なくなり、トレーナーとのやりとりに注意を向けている様子であった。課題中にうとうとするなど、リラックスした状態であることもうかがわれた。このように、トレーナーがAへの関わり方を変えたことによって、Aが自体やトレーナーとのやりとりに注意を向け始めたことや、Aがリラックスして課題に取り組むようになったことなどが示された。

Aのような重度重複障害を持つ人々と関わる際、言葉でのコミュニケーションが制限され、相手の感情や意図も見えにくいために、支援者側は戸惑いを覚え、その対応のあり方を考えるに終始してしまうことあるのではないと思われる。あるいは、彼らの感情や意図を受け取る前に、こちらの要求を一方的に伝えてしまうこともあるかもしれない。しかしながら、支援者側が気持ちを安定させ、重度重複障害者の感情や意図の表現に注目し丁寧に受け取ろうとすることが、次項で述べる「共同体験」の基盤をつくることにつながるのではないかと考えられた。

2. 重度重複障害者と「共同体験」するための課題設定と援助

本事例においては、Aが自分の身体の感覚に注意を向け、Aが他者と感覚を共有すること、自身の身体や感情をコントロールしていく体験を積んでいくこと、そしてそのようなやりとりのなかで心身ともにリラックスした状態で過ごせることを目指し、腕挙げ課題と肘屈げ課題の二つを主に実施した。これらの課題では、Aがトレーナーと共に腕を動かしていくなかで、トレーナーの動きに合わせてたり、緊張を弛緩させたりするなど、他者との非言語的交流を行うことができ、相手に合わせて自己を統制していくことが求められると考えられたためである。しかしながら、#1の時点では、Aは課題中もぼんやりとした様子で、自体やトレーナーとのやりとりに注意が向けられていないことが多かった。これは、先述したトレーナーのAに対する姿勢が大きく影響している可能性が考えられるが、トレーナーについても振り返る必要があると考えられる。

まず、援助の位置について振り返ると、#1の時点では、腕挙げ課題、肘屈げ課題において、Aの手首と肘に手を添えて援助を行っていた。しかしながら、Aは手首から先の末端部分のコントロールの難しさがあり、特に肘屈げ課題ではその困難さに直面しやすかったのではないと思われる。このような点から、Aは自体の感覚に注意を向けることを避け、他の刺激に注目していた可能性が考えられる。そこで、#2からは、Aが特にコントロールの困難を示す手指の援助に重きを置いた。Aが抱える困難をトレーナーが理解し、共にその困難に向かって対処していく体験が必要だったのではないかと考える。このように、Aがどの部分で困難を抱えており、その困難をどのようにして支援していくのかを踏まえて援助の位置を考えていくことが、#2以降のAとの「共同体験」に必要であったように感じられる。

また、援助のあり方について考えると、#1の時点では、Aが腕を動かすか、トレーナーがAの動きを促すかという一方通行的なやりとりになっていた。Aはこの課題中に何をすればいいのかわかりにくく、結果として一方的なやりとりになっていた可能性が考えられる。#2からは、言葉で要求を伝えるだけでなく、トレーナーの援助によってAの感覚を受け取り、トレーナーの意図を伝えることを意識した。具体的には、Aの手指に緊張が入った際はトレーナーも同等の力で手を握り、Aが緊張を弛めるのに併せてトレーナーも手を握る力を弛めていくことで、トレーナーがAの緊張や弛緩の感覚に添っていること、理解していることを非言語的に伝えていくよう努めた。そして、そのやりとりが自然とできるようになってから、今度はトレーナーが先にAの手を握る緊張を弛め、Aに対して緊張を弛めていくよう非言語的に伝えていった。最初はAがこのトレーナーの関わりに反応することはほとんどなかったが、Aがふと緊張を弛められた瞬間に、「そうです、そうです」と肯定的な言葉かけを行いながらさらにトレーナーが力をゆるめると、Aもさらに緊張を弛めることができた。このようなやりとりが可能になって以降、Aは課題中にリラックスした表情を見せたり、トレーナーに腕挙げ課題をもう一度行いたいとジェスチャーで示したりするなどの変化があり、課題以外の場面でもこちらの要求に沿って自身の感情に折り合いをつけることができる様子が示された。

本吉（2013）の事例では、動作法によって「言語表現に制限があるAの身体から直接的に表現を受け止め、そしてトレーナーが身体を通して直接的に関わり、言語に依らずとも相互に意図

や感情を伝えることができる」と述べている。本事例においても、自分の意思通りに身体を動かすことが難しく、言語的なコミュニケーションに困難を有するAにとって、外界と自己とをつなぐ身体を通して他者と体験を共にすることにより、上記のような変化が生じたのではないかと考えられる。課題中に感じていたAのうまくいかなさやもどかしさをトレーナーが直接感じ、その感覚を共に体験しているということを直接的に伝えていくこと、そのもどかしさを共に乗り越え、「できた」という感覚を共有することができたのではないかとと思われる。このように、重度重複障害者にとっては、動作法でもたらされる非言語的な「共体験」は重要であると考えられる。

IV. 文献

- 文部科学省特殊教育の改善に関する調査委員会（1975）。「重度重複障害児に対する学校教育の在り方について」。
- 藤岡孝志（1987）。「動作療法の治療過程に関する一考察—転換ヒステリーの事例を通して」。心理臨床学研究，5（1），14-25。
- 成瀬悟策（2009）。「日本の心理臨床3 からだとこころ—身体性の臨床心理」。誠心書房
- 石倉健二（2001）。「対人関係を拒絶する肢体不自由者の動作面接過程についての一考察—自体志向性の視点から—」。心理臨床学研究，19（5），489-500。
- 本吉大介（2013）。「重度・重複障がい者に対する臨床動作法を通じた関わりの意義—自立活動6区分の視点からの心理リハビリテーションキャンプにおける実践の考察—」。教育研究，39，12-22。
- 徳永豊（2003）。「自発的な動きの乏しい重度・重複障害児の対人的相互交渉の成立について」。特殊教育学研究，5，45-51。

Examples of Dohsa-Therapy aiming at “co-experience” with severely handicapped people with strong commitment

Akane SHIRAHAMA

Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University

Satoshi KOGA

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

In this paper, we examined cases that we conducted Dohsa-Therapy for severely handicapped people who have problems such as strength of feelings and instability of emotions, and aiming at “co-experience”. On the first day, a rarely turned trainee attention to himself, and the trainer was confused by the one-way interaction during the task. From the second day onwards, we were aware of the verbal and non-verbal communication that the trainer felt A's tension and movement and felt that feeling in the same way in the arm raising and elbow bending tasks. The trainer tried to indicate how he wants to relax and how he wants to move not only using linguistic teaching, but also using touched hand to A. As a result, since the second day, A has been more relaxed and he have requested to do the task with the trainer. In addition, A was able to control his emotions even in situations where his request was not accepted in situations other than tasks. In this way, it is suggested that repeated “co-experience” through the body by the movement method may be effective in supporting emotional aspects for people with severe multiple disabilities who have difficulty in verbal communication.

Keywords: severely handicapped people, Dohsa-Therapy, “co-experience”, intellectual disability, physical disability